

私は一九九五年五月一日から日誌を毎日パソコン上でつけている。もはや歯磨きと同様で、書かないと気持ちが悪い。なぜこの日が起点かというと、パソコンをはじめて買ったところで、操作に習熟しなかったというのが動機だった気がする。

パソコンで日誌を記す最大の強みは、検索機能を活用できる点である。十年前の、あるいは二十年前のいまごろはなにをしていたのか。日付を検索ボックスに入ればたちどころにわかる。ちなみに、きょう二〇一八年一月二三日の二十年前の日誌にはなにが書かれていただろうか。

「九八・一・二三金。八時起床。少し寒気と筋肉痛。さては風邪を引いたか。(略) 一時半に研究室を出て、和泉へ。意外に学生が多くてびっくりした。型どおり、試験のことを告げる。終了後、帰る。すぐに熱を計ったら三七度五分。こんなにあるとは思わなかった。薬を飲んで寝る。夕食も手を付けた程度。(略) 夕食後もひたすら寝る」

この一九九七年度には、経営学部の現代政治論を和泉で担当していたことを思い出した。また、いまなら八時に目覚めるなどありえない。前日の日誌をみるとコンパで夜遅

く帰宅したとある。眠る力があつたのだと当時をうらやましく思う。

それにしても、二十年前のいまごろも体調を崩していたのかと苦笑した。というのも、今年の一月十九日から私は、インフルエンザB型にかかってしまったからだ。毎年、予防接種は受けている。にもかかわらず…… ついにかかってしまった。はて、この前はいつだったか。日誌を「インフル」で検索してみた。

すると二〇〇二年の年末にかかっていたことがわかった。そのせいで、家族で帰省ができず、実家の母親を残念がらせたのだった。それ以来の十五年ぶりか。ならば、滅多にできない経験だ。その発症から回復までを振り返っておきたい。

一月十九日(金)の午前二時半ごろ。悪寒がして目を覚ます。体温を計ると三七度五分だった。幸いこの日は授業も校務もなかった。軽い朝食をすませて布団に入り続けたが、熱は三七度五分前半を行き来している。インフルの検査は受けておこうと内科に行く。結果は陰性だった。ただ、検査時に医師の「かかりはじめの時期だ」と出ないことがある」との一言がひっかかった。昼食後、処方された薬を飲んで再びまどろんで体温を計ると、平熱に戻っていた。単なる風邪だったのだと早合点して、パソコンに向かって作業をはじめてしまった。

ところが、一時間ほどして寒気がしてくる。計ると三八度を超えていた。降参して布団に潜り込んだ。あす二十日(土)の研究会では自分はコメント役なのだが、これでは

とても務まらない。責任者に欠席の連絡を入れる。問題なのは、その研究会がリバティタワーでの開催で、自分が行かないと操作卓のキーが開けられず、マイクもパソコンも使えないことだ。政治経済学部助手のS君に連絡を入れる。すぐに返事が来て、あすは勤務日なので解錠作業などを代行してくれるという。まさに神に感謝した。

一月二十日(土)の午前中は熱が三七度台に落ちた。やはりインフルではないと思いたくしようがない。というのも、翌日は私が講師役のミニレクチャーがあるのだ。責任は重い。しかし、午後になるとまた三八度以上の熱と寒気にうめくことになる。布団から手を出してスマホを操作するのさえつらい。ようやく、その会の事務局長に病状を伝えて延期してもらおう。二日連続の不義理は精神的にきつい。

一月二十一日(日)の午前中に、日曜日にも診療している医院を受診する。検査の結果はインフルエンザB型だった。正直いって、これをきいて気分がむしろ楽になった。ならばあすの授業の休講も「おおいばり」で伝えられる。タミフルが処方された。だが、これを服用しても熱は簡単には落ちない。この日も三八度以上の熱に苦しめられた。

一月二十二日(月)の夕方まで同様の症状が続いた。いつになったら下がるのだと捨て鉢になる。それが、朝食をとったあたりからみるみる解熱が進んで、午前中にはほぼ平熱に戻った。とはいえ、金曜日のことがあったので油断せず、布団にくるまる。午後になっても熱は上がらないのでリビングにパソコンを広げて、たまってきた用事を片付け

る。それでも、三日以上伏せていたわけだから、根気が続かない。気分転換に窓の外を見ると、しんしんと雪が降っていた。通常どおり授業に向かっていたなら、帰りの足に苦労したかもしれないと重ねて神に感謝する。

あす二三日(火)はどうしても出校しなければ。自分が責任者の会議や作業が午後ずっと続くのだ。熱も下がったし行けるだろう。これを事務方に伝えると、無理するなと二度メールで念押しされる。かつて、某学部でインフルの教員が来校して他の教員にうつしまくって、入試業務が大混乱に陥ったことがあったと書き添えられていた。「お前がいなくても問題ないから、引っ込んでいろ」ということだなと悟った。

実は二一日にインフルの確定診断が出た際、私は医師から回復後の外出できるまでの日数を指示されていた。本人は大丈夫でもまだウイルスをもっている。周囲にうつさないために、解熱後二日間自宅静養するようにとのことだった。ということは二四日(水)までは禁足だ。当然だが、二三日の諸校務は私不在でも滞りなく終わった。

さて、十五年ぶりにインフルにかかって骨身に応えたのは、周囲のバックアップのありがたみである。人間は一人で生きているわけではない。一方で、組織は一人くらいいなくてもなにごともなかったように動いていくことも再認識した。休むことをちゅうちよしてはならない。そして、不義理もめつたにあることではない。説明し謝ればなんとかなる。だれしも病気になるのだと割り切って不義理を恐れない。これが身を守るポイ

ントなのだろう。

二〇一八年一月三日（火）

五日間も剃らずにいた無精ひげをいじりながら。

四年生卒業論文要旨